



開催報告

くにたちデビューコンサートVol.10

今ここに生まれる「表現」

平成29年度文化庁「文化芸術創造活用創造拠点形成事業」



2/17 日 **14:00** 開演 (**13:30** 開場)

くにたち市民芸術小ホール
Kunitachi Community Arts Center

主催：(公財) くにたち文化・スポーツ振興財団 協力：国立音楽大学

後援 国立市教育委員会

助成：平成30年度文化庁「文化芸術創造拠点形成事業」



お問合せ 公益財団法人くにたち文化・スポーツ振興財団
Kunitachi Arts and sports Foundation

〒186-0003 東京都国立市富士見台2-48-1 くにたち市民芸術小ホール
TEL | 042-574-1515 EMAIL | shimazaki@kunitachibiennale.jp

SUMMARY

金 ヨハン：de-reference
編成 | チューバ+エレクトロニクス
坂本 光太 (Tub.)



公演や展示形式の新たな可能性への示唆

平成 26 年 7 月に国立市と国立音楽大学との間で包括連携協定が締結されたことを踏まえ、(公財)くにたち文化・スポーツ振興財団では、芸術環境創造事業における学校連携事業に位置づけたプログラムを実施しています。

平成 30 年度においては、文化庁「平成 30 年度文化芸術創造拠点形成事業」に申請し採択されました。

この度の公演では都心以外ではなかなか聴く機会のない、**現代音楽**を取り上げました。アコースティック楽器のみで編成した作品、電子音響を加えて構成した作品、視覚表現も取り入れた作品など多様で質の高い作品が並びました。国立音楽大学のなかでは、主に従来のアコースティック楽器を使った作曲専攻と電子音響も使用するコンピューター音楽専修に分かれています。本公演では国立音楽大学の今村央子教授、今井慎太郎准教授の監修の下、それぞれの分野から選抜された優れた若手作曲家 8 名が新たに作曲し、卓越した演奏者達によって、タイトル通り、まさに今ここに生まれる表現として発表されました。

本公演では、特殊奏法はもちろん、映像やパフォーマンスが加わったり、マイクで拾った楽器の音をコンピューターで様々なエフェクトをかけて出力したり、生の楽器の音と重ねたりすることで、通常の演奏では不可能な新たな音響空間を創り出します。それは**音楽表現の可能性のみならず、新しいコンサートや展示形式への示唆や、異なる聴衆層の発掘**、さらには**音楽を志す人へ別の角度の視点を示す**など次世代の芸術環境への提言を含んだ公演となりました。

聴衆をインスパイアする現代音楽という体験

一般になじみのない現代音楽は、従来の顧客層とは異なる層への告知とともに、足を運んだお客様に現代音楽は面白いと思っただけの舞台進行に留意することが必要だと思われます。



根岸 藍：Suite for piano and computer
編成 | ピアノ+エレクトロニクス
伊藤 明子 (Pf.)



伊藤 彰：Ritmico
編成 | ヴァイオリン+ピアノ
薬科 杏梨 (Vn.) 伊藤 明子 (Pf.)



丸橋 絢乃：square
編成 | ヴォーカル+エレクトロニクス+映像
重田 栞 (Vo.)

REPORT



- (1) SNS・ウェブサイトなどでの告知
- (2) peatix での告知・チケット販売
- (3) ギャラリーなどアート分野への告知
- (4) 財団紙でのトップ掲載や新聞への露出
- (5) 観客の興味を引き、理解を助ける進行

アンケート回収分は 53 枚 /124 人、その結果によると出演者、知人の紹介によって公演を知ったお客様が多かったので、音大の先生方や学生の皆様による告知が、この度の集客に繋がっていることがうかがえます。この中には音楽関係者であっても、異なる分野の方々も含まれていると思われます。

また、告知範囲の狭い市内掲示板、矢川 / 谷保駅ポスター、芸小ホール of HP、財団紙オアシス、読売新聞による来場者も 1/3 あることから、都心ではなくとも周辺地域に現代音楽に関心のある層を見込めることに、今後の可能性を見出します。一般と思われる方の回答では、むしろ評価は分かれますが、「あまりよくなかった」を選択したのは、2 人に留まり概ね高評価でした。

こうした「観客の理解を助ける」試みは、新聞やオアシスでのインタビュー記事や写真で告知に努め関心を喚起したことだけでなく、公演中、曲間の転換時間を利用して、作曲家への質問形式でナビゲーターがつないだことも効果があったことをアンケート結果より知ることができます。通常、演奏者の声を聞く機会もほとんどありませんが、まして作曲家の声を聞く機会は無に等しい、さらに作曲家がどのように考えて作曲したのかを肉声で知ることができるのは、この公演だからこそ実現できるものです。

しかし、現代音楽の魅力というのは、作曲家の意図とは別に、聴衆の脳裏や心にそれぞれのイメージを自由に描きやすいということかもしれません。あるいは単にイメージというより、その音楽環境によって深くインスパイアされる可能性があります。本公演も、終演後、作品についてあれはどのようなことだったのか、これはこういう意味だったのかと、聴いた人同士会話をせ



金田 望：雪の言葉、言葉の雪 - 金田 望 (Cond.)
編成 | ソプラノ + フルート + チェロ
豊谷 紗帆 (Sop.) 村上 聖 (Fl.) 佐藤 菜 (Vc.)



上野 壽久：Kork - for cello and computer
編成 | チェロ + エレクトロニクス
山口 奏 (Vc.)



REPORT

白岩 優拓 : (Re) BIRTH ~ヴィブラフォンと電子オルガンのための~
編成 | ヴィブラフォン+電子オルガン
仲田 清志 (Vib.) 竹蓋 彩花 (EOrg.)



インスペクター：伊藤 彰さん (左) 関直人さん (右)

ずにはいられない、あるいは反芻するように自分の中で考える公演だったのではないかと思います。

現代アートにも通じるところですが、作り手は作品を通じて聴衆に問いを投げかけ、作り手の投げた石によって自分の中に波紋が起こるプロセスこそが聴衆が受取ったものではないでしょうか。

本公演では、音楽が二次元空間、三次元空間をイメージさせ、映像の推移やパフォーマンスのストーリー性が四次元空間を想起させることで、そこからアートや演劇、舞台美術、クラシック音楽公演、展示、アートプロジェクトなど芸術分野に横串を通したり、例えば教育や医療など異なる分野に縦串を通したりできるような示唆を内包しているようで、大変興味深く思われます。

プロフェッショナルな知見の共有

芸術の魅力のひとつは、非日常性でありその要素としての意外性を挙げることができですが、アンケートの回答にもあった「常に次は何が起きるのだろうといったドキドキ感に溢れた二時間半」に尽きます。換言すれば、通常の公演を組む際にも**観客への魅せ方、演出**という点に応用できる知見です。

国立音楽大学に学ぶ音楽家のプロフェッショナルな知見と運営側の蓄積された公演開催の知見を相互に交換しながら、この度良い**公演を共に創る**ことができたことは、今後にもつながる大学連携の良い形に大いに期待できる仕組みのひとつではないかと思います。

また、電子音響を使用する公演は専門知識と技術をもつスタッフの協力は重要ですが、本公演は部学生が主たる音響・照明操作、舞台スタッフとして入り、当ホールの音響照明を担う(有)アイジャクスの木原・原島の技術協力のもとに実現しました。必要な機材の搬入からセッティング、操作に至るまで連日大変だったと思いますが、当館の照明音響のプロフェッショナルと共有することがあったことを願っています。

